

土佐のまほろば囃子が完成

市民の前に披露される



つからの「お囃子好き」で、「集まるのが楽しくて苦勞らしいものは全然感じない」と週二回練習を続け、今では快い音色を聞かせてくれるようになりました。

曲は全部で「平安」「熊蜂」「えんこう」「歓迎」「穂波」の五曲で、江戸神田囃子をベースにした南国らしい明るい軽快なリズム。演奏する場によって様々な組曲を作って演奏しています。

テンツク、テテツク——まほろば囃子の軽快な調べが十一月十一日、商工会館に響き渡りました。この土佐のまほろば囃子は、全市的な文化イベントがほとんどない南国市に郷土芸能をつくらうと市民が取り組んでいたものです。昭和六十一年に土佐のまほろば囃子振興会を結成。東京都の篠笛演奏家尾股真次さんと鼓演奏家望月久恵さんに作曲と演奏指導を依頼し、練習に励んできました。

最初のうちは笛の音が出なかったり、音がそろわなかったりや苦勞の連続でしたが、会員は全員根

土佐のまほろば囃子振興会事務局長の高木さんは「まほろば囃子はメンバーのものではなく、市民のもので。私たちはそれを一番初めに演奏できることがたいへんうれしい。今後は南国市の文化的シンボルとして育てていきたい」と話していました。

土佐のまほろば囃子

振興会長 浜田一雄

まほろば囃子としての形ができました。今後これを大きく広めていくためには、まず演奏者を増やさなければなりません。現在のメンバーが指導者となって各地区で練習会を開いたり、小学校でも取り組んでもらったりして徐々に大きくできたらと思っています。

また、これまでのように限られた場所で行うのではなく、市民みんなに聴いてもらえる機会を多くしたいと考えています。そこで来年の市制施行三十周年を契機にまほろば囃子が一つの核となるような市民の祭りを創出してはど

うでしょうか。京都の祇園祭りのように車の上で演奏するのもいいと思います。この方法であれば演奏者でなくても車を引っ張ったりすることでもまほろば囃子に参加することができそうです。

来年は結成の舟出をしのぶ「土佐日記の舟旅」も行われます。舟

まほろば



年越山より国分方面を

大和は 国のまほろば たたなづく……と歌われた奈良。大和が国のまほろばであれば、この南国市はまさしく土佐のまほろば。

物部川、国分川水系の恩恵を受け、広範な平野を擁しているこの地は古くから土佐の政治、文化の中心地として栄えてきました。土佐の稲作のれい明地として弥生時代前期にはすでに先人が集落を形成。古墳は北の山麓地帯や高知平野の小丘陵に集中しており、その数九十基。現在県下で確認されて

で国分川を下って浦戸湾から大湊までこぎ出すというのですが、まほろば囃子が陸からこれに参加するのいいと思います。

このようにいろいろな機会を通じて、南国市民のまほろば囃子にしていきたいと考えています。

いるものの大半を占めています。律令時代には現在の「国府」に古代の政庁である国衙が置かれ、王朝文化の花が咲きました。かの有名な歌人紀貫之が国司としてこの地に赴任してきたのは延長八年（九三〇年）と伝えられています。平安から鎌倉へ時代が移り、土佐における守護領国制がしかれると、守護代細川氏の居館があつた田村が政治、経済、文化の中心地となりました。戦国時代、天正二年（一五七四年）に長宗我部元親が土佐を平定すると政治の中心は岡豊に移りました。そして元親が四国を平定し、居城を高岡城（現在の高知城）に移すまで政治の中心はこの地にありました。

「まほろば」はすぐれたよいところという意味の古語。先達の営みが時代を彩り、近世まで歴史の表舞台であつたこの地は、まさに「土佐のまほろば」だったので